

シンビジウムの病害虫



株式会社河野メリクロン 生産販売事業部 統括専務

河野 茂信

Shigenobu Kawano

1. はじめに

(株)河野メリクロンは、徳島県の「うだつの町」で有名な美馬市脇町に昭和40年に設立し、当時珍しかったシンビジウムの「メリクロン苗」の生産に取り組みました。「メリクロン苗」は、生長点培養によって作られた苗のことです。当時500ccのフラスコで年間30万本生産技術が確立したことと、50年代の日本国内における新品種開発によって大きく発展しました。「あんみつ姫」は当時の最高級鉢物品種として爆発的な人気品種となりました。平成3年には「マリーローランサン」を発売し話題を呼び、その後も「プリンセスまさこ」や「愛子さま」の品種で脚光を浴びてきました。平成15年にはシンビジウム「マリーローランサン」のエキスをを用いた、育毛剤「蘭夢」を発売しました。

シンビジウムの病害虫については、生産量が増えていくなかで新たな病害が発生しました。なかでも腐敗病・疫病が全国的に発生し、大きな打撃を受けました。

腐敗病については現在でも決定的な防除方法はありません。疫病については、当時山上げ場での猛烈な発生が見られ、一農場では数日間で数千鉢が発病し、破棄を余儀なくされました。今回、シンビジウムの病害虫について生産現場からの視点で書かせていただきます。

2. 細菌による主な病気

・軟腐病（写真1）

新葉の重合部に発生しやすく、水浸状のシミを生じて褐変し腐敗する。腐敗部からは臭気が発生するので、褐色腐敗病との区別が付きやすい。高温多湿

時に発生しやすい。発生の引き金としては、葉の重合部にバークや肥料が入り込むことが原因となることも多い。また、灌水や雨で重合部に水が長時間溜まることも原因の一つであるため、発生が見られた場合は夕方の灌水を控える。

・褐色腐敗病（写真2）

生育中の葉に発生しやすく、激しい場合はバルブまで腐敗する。高温多湿で発生しやすく、特に高温管理する苗・中苗・開花リードに発生が多く見られる。葉先や葉身部に水浸状の斑点を生じ褐色に腐敗する。開花鉢では、1本のリードのみ発生することがあり、これを切除すれば他のリードへの感染を避けることができる場合がある。

3. 糸状菌による主な病気

・腐敗病（写真3）



写真1. 軟腐病



写真2. 褐色腐敗病

初めに葉が生気を失い黄化し、やがてバルブも黄化し、葉が脱落する症状が進むと、根も腐敗してくる。

この病気は品種間で発病に大きな差が見られる。高温時に発病し、発病株の周りの株へと伝染していく。対策として薬剤の処理、植込み材の滅菌、微生物資材の利用など、これまでにいろいろなテストを行ったが、決め手となる方法はない。

発病の多くは、高温時の植え替えによる鉢内の菌バランスが崩れることも原因の一つと思われる。

・疫病（写真4）

一時期山上げ場で全国的に大発生した。

病状は葉に水浸状の病斑ができ、白いカビを生じバルブに移行する。病斑の進行が速い。また、水を媒体とし伝染力が非常に強い。病原菌は土壤にあり、台風による株の棚からの落下や、雨による土の跳ね上げ、洪水による株の水没などで発病する。気温が

下がり朝露が発生する時期に発病すると、露が媒体となりつぎつぎと感染していく。そして、雨の日に人が圃場を移動すると感染していく。土の跳ね上げには棚を高くすることと、棚下にマルチを被覆することが有効である。棚からの落下株や水没した株はできるだけ速く綺麗な水で洗い流し薬剤散布する。



写真3. 腐敗病



写真4. 疫病

【写真提供】徳島県立農林水産総合技術支援センター 高度技術支援課

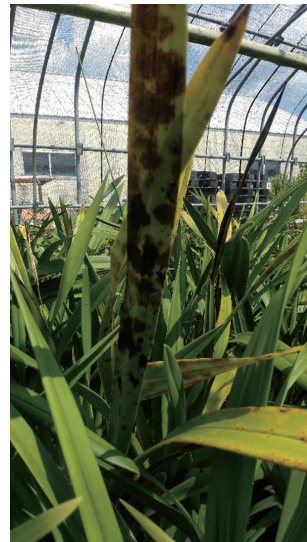


写真5. 斑点性病害



写真6. 黄斑病

大量発生すると防除が困難になるので初期対応が重要となる。発生株を見つけたときは、ビニール袋に入れ他の株に接触しないように持ち出す。

・斑点性病害（写真5）

サーコスポラ菌による病気で、葉の表や裏に発生し病状が進むと落葉しやすい。

黄系品種や老化した葉、ダニの被害葉にも発生しやすい。大量発生した農場では、新葉にも発生が見られる。この病気も腐敗病と同じで特効薬はない。葉焼け・チッソ飢餓・ダニの発生に注意する。



写真7. 炭疽病

・黄斑病（写真6）

フザリウム菌によるもので、生育中の未展開葉に発病し生育抑制がおこる。一時期全国的に発病が見られたが、最近は少なくなった。

症状としては、中央部がへこみ周囲が盛り上がり、病状が進むと黒変し穴が開くことがある。

・葉枯病・炭疽病（写真7）

葉焼け・根腐れ・肥料の濃度障害などで老化した葉の先端部に発生しやすく、進行することが多い。

発生が見られた場合は病斑部をカットする。

4. 害虫

・ハダニ

シンビジウムの害虫の中で最も発生が多いのがハダニである。作物の中でこれほどハダニが好む植物は他にないのではないかと私は思っている。

発生が進むと葉色が落ち株が弱り、花芽の発生が悪くなってしまう。また、葉の裏側が白くかすり状になり、開花期には花のつぼみでの発生加害が見られる。発生は周年を通じてであるが、ハウス内の温度を上げる2月～5月は約20日間隔で発生が見られる。

防除についてシンビジウムでは100%の殺ダニ率が求められる現在、殺ダニ効果の高い農薬はダニオーフロアブル、アバメクチン乳剤、ジエノクロル水和剤、ピフルブミド水和剤である。ダニ剤の多くは浸透移行性のない薬剤がほとんどで、直接ダニ剤がハダニにかからないと効果が出ないため、散布時には薬量・散布ノズルの選択・薬剤が裏葉にかかっているかのチェックが必要である。

散布後は必ず生き残りのハダニがいないかチェックし、いれば1週間後に他の薬剤を散布することが必要である。また、ダニ剤は抵抗性が発達しやすいので、使用回数を守り、かけ残しのないよう散布することに注意が必要である。

くん煙剤については、登録のある薬剤はいずれも抵抗性の事例があり有効な剤はない。開花期においてはくん煙剤で対処したいので、ぜひ有効な剤を発売してほしい。

・ケナゴコナダニ

このダニは本来植え込み材のバークや有機肥料の中で生息しているが、花茎の苞葉内側にも生息し、特徴として花の下部から上部へと順次上っていく。

開花前のつぼみや開花した花の花粉塊に入り花粉塊が脱落したり、刺激してエチレンを発生させることによりリップが紅変し、花持ちが悪くなる。

・アザミウマ類

アザミウマ類の加害は多くはないが最近増えている。特に山上げ場で、早く伸びた花茎のつぼみに傷をつけ吸汁した部分の花弁が盛り上がり商品性がなくなることがある。

薬剤としてスピノサド水和剤、アバメクチン乳剤、

コテツフロアブル（ミカンキイロアザミウマのみの登録）、モスピラン顆粒水溶剤などが有効である。

・アブラムシ類

つぼみや開花した花弁に発生するため、くん煙剤での対応がほとんどで、薬剤としてモスピランジェットが多く使用されている。

・ナメクジ・カタツムリ類

花やつぼみ、根の先端、新葉などを食害する。葉については品種により特に好む物もある。

根の再生が弱い品種では、苗の段階で先端を食害されると生育に大きな影響をうける。

薬剤としてはメタルデヒド剤、燐酸第二鉄粒剤がある。

・ガの幼虫

開花時、花のリップとずい柱の間に糸を出し蛹になる種類がいる。大きな食害があるわけではないが、なぜかこの場所を好む。幼虫は動きがとても速く、わかりにくい場所だが、リップの上に黒く小さな糞が見えるのでいることがわかる。

開花前のフェニックス顆粒水和剤散布の効果が高い。

5. おわりに

私は全国のシンビジウム生産者に病虫害対策と農薬情報をアドバイスさせていただいています。家の農場では野菜・果樹を含め数十品目を生産し、農薬係をしています。一般の方は普通物であっても、農薬＝毒というイメージがあまりにも強いことに違和感を持っています。

戦後の食糧増産時代には、農薬の安全基準が十分でなく事故もありました。輸入も含め食糧が十分な時代になり、無農薬という言葉がもてはやされる時代になりました。一般の方には農薬登録されるまでの過程や、安全基準が知られていないことが要因ではないかと思われます。もっと農薬の安全性をアピールすることの必要性を感じています。人間は病院へ行けばたくさんの薬をいただけますがこれは薬で、植物の薬は毒と考えられる人が一般的です。アレルギーを持たれている方には無農薬は必要で、否定するものではありません。減農薬は必要です。登録のある農薬でも現在効果の少ない薬はたくさんあり、むやみに散布すれば良いものではありません。

新薬は効果が高いが値段も高い、登録が少ないな

どの問題もありますが、効く薬を散布することが減農薬につながります。

対象病害虫に最も効果が高い薬剤は何か、どのタイミングで使うことがベストかを検討することが必要です。

シンビジウムは花き類・観葉植物に登録のある農薬を使用することになっていますが、これらの農薬で病害虫の発生をクリアできません。もっと多くの農薬で登録を取って欲しいものです。

野菜においても最近は産直の店が多くでき、スーパー・コンビニ等でも産直コーナーを作る店舗を多く見かけます。このような店に納品する野菜などの多くは、高齢者や退職者により小規模多品目の生産が行われています。このような中で農薬の使用は、登録の関係から複雑で難しいのが現状です。登録費用の問題がありますが、できるだけ幅広い作物登録をしていただければ幸いです。